

『時事新報』文芸欄の研究（大正14年7月〜12月）

——付・「文芸」欄目録（一二）——

池内輝雄

はじめに

「時事新報」は福沢諭吉によって明治十五年（一八八二）三月一日に創刊され、昭和十一年（一九三六）十二月二十五日付けをもって廃刊、「東京日日新聞」に合併された日刊紙（大正七年六月一日からは夕刊紙も発行）である。おおむね経済・政治面にその特色を発揮したが文芸・芸術面にも多くの紙面をさき、評論・小説・随筆・詩・戯曲などを掲載し、文芸史上に大きな役割を果たした。しかしその実体・成果についてはほとんど研究がなされてこなかった。筆者は基礎研究として文芸関係の「目録」の作成を志し、すでに「目録一」〜「九」を、「大妻国文」（第十一号〜二十号、80・3〜89・3、ただし十七号を除く）、「一〇」を、「大妻女子大学文学部紀要」第二十二号、90・3、「一一」を、「稿本近代文学」（第19集、94・11）に掲載してきた。

*

文芸・思潮の特質・動向を雑誌・新聞などの特定のメディアの側からとらえることはじゅうぶん意味のあることと考える。本稿の意図も究極的にはそこにある。ただしここでは、「時事新報」大正十四年（一九二五）後半期（七月一日〜十二月三十一日）という短期間に限定し、文芸欄を中心に概観するにとどめる。このような時期区分は「目録」作成のための便宜的なものに過ぎないが、特質・動向の一端を垣間見ることは可能と考える。

「時事新報」では、大正九年一月からこの年九月まで、佐佐木茂索が文芸部主任であった。彼は入社以前、久米正雄、芥川龍之介、菊池寛らと親交があり、入社は菊池の世話によった。彼は、菊池の創刊した「文芸春秋」（大12・1創刊）、川端康成、横光利一らと創刊した「文芸時代」（大13・4創刊）の同人として自らも新進作家の道を歩みながら、「時事新報」の文芸関係（文芸欄以外も含む）では多くの刷新を行った。たとえば、新人作家の発掘に力を入れ、十年に懸賞短編小説で藤村千代（宇野千代）・尾崎四作（尾崎士郎）を、十四年に懸賞長編小説で池谷信三郎（「望郷」）を世に送り出し、

東大在学中の川端康成に文芸時評（「今月の創作界」大11・2・1）を書かせて川端に時評家としての才能を開花させた。また先の「望郷」の連載では挿絵に村山知義を起用し（のちに田中良に変更）、その構成派風の前衛的な作風によって新聞連載小説のイメージを一新させた。その他、「文芸時代」の同人はもとより、自身と大橋房子（ささきふさ）との結婚の媒酌人でもあった芥川龍之介、三田の関係の泉鏡花や佐藤春夫らの中堅作家、さらには常連に近松秋江、廣津和郎らを擁し、充実した執筆陣と内容を誇っていた。この時期の「時事新報」文芸欄は、「佐佐木茂索時代」といった趣さえ感じられる。

十四年後半期では、まず中村還一の「利那の生命感」（6・30、7・1、3、5、7、8。5回連載。ただし5日と7日は重複掲載。「目録」には初出の6・30の項に記載）が注目される。中村還一は「文芸時代」に、「思想の彼方へ―新文芸の基調に関する一考察」（大14・4）、「個性への帰属―十一谷氏の所論に触れつつ」（大14・5）、「新感覺派及びモオランの『夜ひらく』に就て―生田長江氏に与ふ」（大14・6）を表した新進の批評家であった。「利那の生命感」は内容的には「思想の彼方へ」と一部重なるが、「生命感のより切実なる表現」こそが文芸の本質とし、「思想の彼方に我々が実在する。利那から利那へ、それ自身の意識の唯一として実在する。我々は、利那の生命感の裡に我々自身を仮想し、我々自身を消費する」といった表現を獲得した作家としてポール・モーランの名をあげる。

モーラン『夜ひらく』は堀口大学訳で「現代佛蘭西文藝叢書」[5]の一冊として新潮社より前年の大正十三年七月十五日に刊行されたが、「文芸時代」にその名がとりあげられるのは割合遅く、赤木健介「新象徴主義の基調に就て」（大14・3）がはじめてで、最も本格的に論じたのが先の中村の「新感覺派及びモオランの『夜ひらく』に就て」であった。一方、「時事新報」の紙面でのこの訳書については早く言及したのは佐藤春夫の「『夜ひらく』を薦む」（大正13・10・1）であった。佐藤の文章は見開き二頁掲載（約三五〇〇字）で、作品の梗概とともに「文体の頗る新しい」こと、「新しい文明の基調」をさぐる主題をもつことなどを指摘したものである。その後、武川重太郎「文芸と近代生活」（大14・3・31）（4・3）、酒井真人「文学―口舌気」（大14・4・5、8）などがモーランをとりあげる。武川は「不同調」同人で「文芸時代」にも執筆、酒井は「文芸時代」の同人である。「時事新報」文芸欄では、主に「文芸時代」関係者によつてモーラン熱といったものが醸成される。

一方、アナキズム系の林政雄の「はつきりしない文学季節に対する一批評」（8・12、13、15）、「種蒔く人」を経て「文芸戦線」の主力メンバーだった今野賢三の「文芸と主観」（8・20）（23）などは、文芸の「内容」に重点を置こうとするものである。林は、現在の文学が「指標も、動向も、決定も、表現も有たない」「過渡期」にあると断じ、その原因

に、一は既成文学が「転換期」を迎えているのに「交替者」が現れないこと、二はプロレタリア文学が「挑戦状」を提出したままにとどまっていること、三は新感覚派の文学が「無内容と無表現」であり、文学的地位を維持しようとして作家が「技巧の焦慮と苦心と悲劇にとどまつてゐる」こと、にあると指摘する。ここに示された文学界の現状分析は、後の平野謙の「三派鼎立説」に見合うものであり、その先見性が注目される。今野は、「表現や手法」よりも「プロレタリアの、動的な生命乃至主張が、必然に一つの、主観的な表現手法を産み出してゆく」ことを主張する。ここには「内容的価値論争」(大11)から「目的意識論争」(大14)にいたる一連の論争との関連が認められる。

ほかに、中村武羅夫「公器と私器の問題―菊池寛に与ふ」(10・24、25、27、28)は、「新潮」の編集方針を批判した菊池寛に反論したものである。当時「文芸春秋」・菊池寛と、「新潮」・中村武羅夫との対立は、その系につながる「文芸時代」と「不同調」との対立にまで及ぶと喧伝された。中村は「新潮」が「一党一派」に偏しなかつたことを主張し、菊池を駁したが、菊池は応ぜず、論争までにはいたらなかつた。その延長として井汲清治「文芸新主義の興亡」(11・12)14)、上司小剣「文壇の党派的傾向」(11・22、25)、徳田秋声「党派の力と個人の力」(12・17、18)他の論を派生させた。井汲はプロレタリア文学も新感覚派も「スクール」(主義)の集まりではなく、ただ「グループ」(仲間)でしなかつたことを指摘する。上司も「党派の団結」によって「一個の凡才を天才に化する」と揶揄し、暗に新感覚派その他の同人結社を批判した。これらの言説を裏返せば、当時の文学界は内的結集力を失い、混沌状態にあつたといふことができる。

個々の作家・作品をとりあげたものでは、間宮茂輔が「文芸寸言」(7・19)で葛西善蔵の「家庭(…)破壊」の消息を伝え、つづいて友人の谷崎精二(「苦悶派の文学」7・24)28)が、世田谷の葛西宅を訪れたさいの葛西の「生活苦の傷ましき呻き」とそこから働き出す「創作力」の関係を好意的に描き出す。いうまでもなく、当時の新聞の役割は世間が関心を寄せる出来事をいち早く報道することにあつたが、文芸欄においても例外ではなく、このあと川崎備寛「批評と感想」(8・16)19)、無署名のコラム「灰皿」欄(10・16)、読者の投書「唐辛」欄(12・9)でも繰り返し言及される。こうして新聞紙上の言説と葛西の「蠶くもの」「権の若葉」の作品内容とが相乗され、いわば葛西神話が作られていく。その他、吉江喬松「小川未明論―時代の内観的覚醒者」(10・23)、関口次郎「新戯曲の方向―岸田君の戯曲集を評す」(11・6、7)があるが、いずれも著作(集)刊行のための文章で、行き届いた理解を示すものの、宣伝臭は否めない。

* 月評類では、七月は神崎清が「七月航海図―二雑誌小説月評」(7・2)5)で横光利一の「静かなる羅列」をとりあげ、「最も野心的な作品」、「小説的手法として(…)人間の集団をマツセとして取扱ひ宇宙及び地球の進化論的運命に配

置して、人類の蒙昧時代より、中世都市の封建制度、近代社会の資本主義の支配下にをける二個の勢力の対抗の歴史を、極めて誇張した筆法、新感覺派の本領を發揮しながら大童で書き上げた小説」と把握し、そこに「明らかにマルクスの唯物史観が多量に導入されてゐる」と指摘する。神崎も当時「辻馬車」に属し、「文芸時代」の「支持者」（高見順「昭和文学盛衰史」一、昭33・3、文芸春秋新社）であつた新進の批評家で、後に「大学左派」を結成するが、この時期には横光利一を先導者と目していたらしいことが明らかである。副題の二雑誌とは「文芸春秋」と「文芸時代」であるが、ここにも佐佐木茂索の意図が介在したと見るべきだろう。なお、七月には「文芸春秋」の同人齊藤龍太郎、「不同調」同人の藤森淳三、同じく「不同調」に属して新感覺派批判を行った堀木克三らが批評に筆を執つたが、見るべきものは少ない。

八月は、月評をやはり「文芸時代」の常連執筆伊藤永之介が担当し、「文芸春秋その他」（8・3く6）と題して「文芸春秋」「改造」「文芸時代」の三誌に限定して掲載作品を批評しているが、総じて印象批評である。つづいて「山繭」同人の木村庄三郎が「八月の作品に就いて」（8・7く9）を表し、伊藤が一蹴した川端康成「十七歳の日記」や網野菊「家」を丁寧論じ、「リアリズムの描写のいゝ処を充分發揮した作品」と評価した。「家」は網野にとつて文壇デビュー作であり、この批評は幸いだったにちがいない。

九月は、廣津和郎「作品読んだまゝ」（9・8く13）、堀木克三「秋季創作大観」（9・9く11）らが筆を執つたが、芥川龍之介、徳田秋声、志賀直哉、里見弴、正宗白鳥ら既成作家を中心にとりあげ、新鮮味に乏しい。十月は、酒井真人「十月の小説」（10・1、7）、古賀龍視「十月の雑誌から」（10・2く3）が、中條百合子の「崖の上」（「伸子」）をとりあげ、「真正面からぶつかつて」いる「力作」として認めながらも、「気儘な感傷家」（酒井）、「深窓に育つ婦人が一本氣に生真面目な苦悶を重ねてゐる」（古賀）と批判したのが目立つ。だが、以後おおむね月評は低調に終始した。佐佐木茂索の退社が禍したらしく、一時文芸欄に活氣が失われた。

*

家庭・婦人欄には、「某知名批評家」ABCの「婦人雑誌の長篇小説」と題する批評文が七月二十三日より八月六日まで九回断続掲載された。対象とした雑誌と作家・作品（短篇も含む）は、「婦女界」誌の菊池寛「受難華」、久米正雄「天と地と」、小栗風葉「緑の路」、「婦人世界」誌の手塚鶴代「葡萄実れど」、「婦人倶楽部」誌の中村武羅夫「女人群像」、佐藤紅緑「幸福物語」、葛西善蔵「老婆」、「婦人の国」誌の加藤武雄「秋夕夢」、廣津和郎「暢氣な叔父と少女達」、「主婦の友」誌の加藤一夫「生に寄する波」、三上於菟吉「春は甦れり」、白井喬二「明暗の峠」、加藤武雄「愛の道」、田山花袋「通盛の妻」、「婦人公論」誌の徳田秋声「恋愛放浪」、「女性」誌の武者小路実篤「彼等と彼女達」、森

田草平「輪廻」などである。右の雑誌のうち、「婦女界」と「婦人世界」は明治期の創刊だが、「婦人公論」(大5・1創刊)、「主婦の友」(大6・3同)、「婦人倶楽部」(大9・10同)、「婦人の国」(大14・5同)などは大正期に現れた新しい女性誌であり、「女性」(大11・5同)にいたっては文芸専門誌の観があった。これらの雑誌に「所謂連続物の長篇小説」(大14・7・23)が多く載せられた事実は、それだけ女性読者層が広がっていたことを意味するであろう。ことに関東大震災後は「急激な飛躍をしたジャアナリズムの風潮」(高須芳次郎「明治大正昭和文学講話」昭8・9、新潮社)とあいまって文芸の大衆化現象が顕著となるが、女性読者の拡大がそれに与ったことはいうまでもない。このような解説・批評の類がいわゆる文芸欄から飛び出し、家庭・婦人欄に進出したことも、その現象と無関係ではなからう。

*

その他のいくつかを特記しておく。

「夕刊一席話」(7・31夕刊)には、「鏡花全集校正」に忙殺される泉鏡花をインタビューした記事が写真入りで載っている。これは春陽堂版の『鏡花全集』の裏話であるが、管見ではこれまで鏡花関係資料として取り上げられていない。鏡花は「はじめ、五十一字十五行の八百五十頁といふ予定だったのが、印刷して見たら、どうして／＼と殖えちやつてね千五百頁なけりや入らねえんだ。(…)仕方がないから組を詰めて五十六字十九行といふことにしてやつと刷つたんですがね、こいつはその筈さ、私の原稿は句読点を一字に数へてないんだから…」(句読点は)めちやくちやです。文選ぢや厄介だと見えて、あんな大事なものを出鱈目に取扱ふんだからあきますよ。一たいに句読点を勝手に減らすやうですね。これには一番泣かされますよ」と語り、用語の面でも「紋着」「並木」を「本屋の校正」が「紋附」「竝木」に直してしまうことの不満を打ち明けている。「鏡花全集」の成立を見る上での貴重な資料であろう。

また、泉鏡花がラジオ放送に出演したさいの失敗談を語った「鏡花先生 ラジオを語る」(12・12)も鏡花関係資料として珍しいものである。これについてはすでに前掲「稿本近代文学」第19集で紹介した。

芥川龍之介「好きな果物の話」(8・11・2)も、全集・作品年譜類から落とされいている逸文である。これについてもすでに「稿本近代文学」第19集で紹介した。

水木京太「放送劇を聴く」(8・11・3)は七月二十八日放送のラジオ・ドラマ、長田幹彦作の「悲しき通路」を批評したものの。場面を説明するために映画の弁士のような「口上役」を使ったこと、音によるイメージ化を怠ったことなどを「失敗」として批判、作品がラジオという新しいメディアに変換されたさいの問題を鋭くついている。また長田幹彦「放送局」(10・14・28)は始まったばかりの放送局の内幕をルポルタージュ風に描いてみせたものとして注目される。

『時事新報』文芸欄目録（一二）——大正14年7月～12月

凡例

- 一 上から順に、日付（最上段の数字）、題名、著者名、「」内注記を表す。
 二 「文芸」欄以外の記載は、日付下に次の記号を付す。

◎……………朝刊紙の別紙面

○……………夕刊紙の別紙面（日付は題字下による）

※……………「時事漫画」（北沢楽天編集、毎週日曜日）

大正14年7月

- 2 七月航海図——雑誌小説月評 神崎清 「以下5日まで。評論。吉田弦二郎「お団子を持つ役」、横光利一「静かなる羅列」、三宅幾三郎「流水」、佐々木味津三「下駄の写真」、菅忠雄「初夏郊徑」、加宮貴一「乾盃」、伊藤貴麿「二代目の接吻」

8 演劇偶評 岡栄一郎 「以下15日。評論」

9 文芸寸言 野武士の弁 間宮生 「短評論」

○ 馱弁家 佐々木邦 「以下21日まで。小説」

10 七月小説九篇評 齊藤龍太郎 「以下11日まで。評論。谷崎潤一郎「赤い屋根」、犬養健「兼介とその通信」、近松秋

江「ある夜の出来事」、室生犀星「暮笛庵の売立」、藤沢清造「女地獄」、佐佐木茂索「傷つく顛顛」、諏訪三郎「二十歳前後の職人」、豊嶋與志雄「或る素描」、里見弴「緑談宴」

◎ 『桐一葉』も出てラジオ本放送。十二日から愈々始まる 「記事」

11 文芸寸言 蛙声喧し 茂輔 「短評論」

12 晤談 岡栄一郎 「以下14日。随筆。室生犀星」

自分と遊戯 廣津和郎 「以下14～21日。随筆」

◎演劇 異風印象記 四谷怪談 三上於菟吉 [以下19日。劇評]

16 二三の作家に就いて 藤森淳三 [以下18日まで。評論。里見弴「緑談宴」、犬養健「兼介とその通信」、室生犀星「暮

笛庵の売立」「あら磯」]

鶏肋 反動派 [短評論。無署名]

不如丘氏より [短信。俳句一句]

17 ◎幻の町のらくがき 秋庭俊彦 [以下25日まで。童話]

19 既成文壇観に就て 堀木克三 [以下23日まで。評論]

読書顧問―『伸び支度』 倉橋惣三 [書評]

文芸寸言 葛西氏の噂 間宮茂輔 [短評論]

21 文芸寸言 文壇階級意識 茂輔 [短評論]

22 ○田園都市 生田葵 [以下2日まで。小説]

23 ◎婦人雑誌の長篇小説 ABC [以下24、28、30、8月1、4、6日。評論。菊池寛「受難華」、久米正雄「天と地

と」、小栗風葉「緑の路」、手塚鶴代「葡萄実れど」、中村武羅夫「女人群像」、佐藤紅緑「幸福物語」、葛西善蔵「老

婆」、加藤武雄「秋夕夢」、廣津和郎「暢気な叔父と少女達」、加藤一夫「生に寄する波」、三上於菟吉「春は甦れり」、

加藤武雄「愛の道」、田山花袋「通盛の妻」、徳田秋声「恋愛放浪」、武者小路実篤「彼等と彼女等」、森田草平「輪

廻」]

夏目與太 川崎長太郎 [以下28日まで。短評論]

24 苦悶派の文学 谷崎精二 [以下26日まで。評論。葛西善蔵]

26 ◎『仮名』研究に生涯を捧げる篤学の七十五翁―きのふ文学博士を授けられた『周代古音考』の…大矢透さん [記事]

28 プロムナード 街頭の文芸 井汲清治 [以下29日「人間の生活」、30日「真」の追求、8月2日「大衆の文芸」

評論]

涼宵低語 宮地嘉六 [以下8月2日まで。随筆]

文芸寸言 噂の忌避 宮城々輝 [短評論]

◎力の強い話 多田不二 [以下7日まで。童話]

◎有島氏の主義を慕ひ浅間の噴火口へ [記事]

29 文芸寸言 潮流 間宮生 [短評論]

30 文芸寸言 同人雜誌 堀木克三 [短評論]

31 読書顧問 善の研究 沼田藤次 [書評]

文芸寸言 通俗小説 堀木克三 [短評論]

○鏡花全集校正―番町で大汗の泉さん―勝手に減らされる句読点 [インタビュー記事]

大正14年8月

1 放送劇を聴く 水木京太 [以下3日まで。評論]

文芸寸言 白鳥老獺 堀木克三 [短評論]

◎果物の食べ方 好きな果物の話 芥川龍之介 [以下2日。随筆]

◎黄門微行録 松林伯知講演 [以下9月12日まで四三回連載。講談]

2 軽い話―鴛の玩具 廣津和郎 [以下10日まで。随筆]

3 文芸春秋その他 伊藤永之介 [以下6日まで。評論。室生犀星「鳴の足」、網野菊「家」、川端康成「十七歳の日記」、細田源吉「素朴な犯人」、佐佐木茂索「行そびれ」、片岡鐵兵「雲とゴルフの球」、横光利一「街の底」、佐々木味津三「京太郎の場合」、諏訪三郎「陽一郎の家」、加宮貴一「兄を発見した弟」、鈴木彦次郎「悲しき玩具」、伊藤貴鷹「焚付」、川端康成「青い海黒い海」、正宗白鳥「雲の彼方へ」、前田河廣一郎「手」、宇野千代「一年間」]

間」]

○妙な巡査 正木不如丘 [以下連載。小説]

4 楽壇一鞭 黒頭巾 [以下5、6、12、16、17日。評論]

文芸寸言 推薦作 堀木克三 [短評論]

5 未明氏と 新井紀一 [以下8日まで。随筆]

文芸寸言 原稿料のこと 川崎生 [短評論]

6 文芸寸言 小さんと文楽 茂輔 [短評論]

◎お月様と赤い鮎の話 清藤森夫 [以下14日まで。童話]

7 八月の作品に就いて 木村庄三郎 [以下9日まで。11日に3回分と重複。評論。川端康成「十七歳の日記」「青い

- 9 海黒い海」、網野菊「家」、葛西善蔵「弱者」、水上瀧太郎「素人小説家の経験」、鈴木彦次郎「悲しき玩具」
 文芸寸言 コント 茂輔 「短評論」
- ◎スクリーンに咲く花―岡田嘉子さん 「記事」
- 11 美しい人形を造ると無心の先生達―山本鼎氏等の手工講習 「記事」
 哲学者の並木道 村松正俊 「以下13、14日。評論」
- 12 はつきりしない文学季節に対する一批評 林政雄「以下13、15日。評論」
 暑中の作品若干 小松原篤 「以下16日まで。評論。廣津和郎「狗が疲れてゐる」、宇野千代「一年間」、宮地嘉六
 「結婚難」、尾崎士郎「窓にうつる風景」、伊藤永之介「みなげ」、金子洋文「泥酔」、網野菊「家」、ささきふさ
 「着眼の仕儀」、佐佐木茂索「行そびれ」、片岡鐵兵「雲とゴルフ」、南幸夫「夏の夜の話し」、横光利一「街
 の底」、伊藤貴麿「焚付」、中河與一「愉快な発見」、鈴木彦次郎「悲しき玩具」、佐々木味津三「京太郎の場合」、
 川端康成「青い海黒い海」、細田源吉「模倣しない運命」、下村千秋「湖畔」、犬田卯「百姓嫌悪」、和田博「少
 年」
- 文芸寸言 練習帖 堀木克三 「短評論」
- ◎三度目 トルコ クユ、イルジム 大久保幸次訳 「以下17日まで。小説」
- 15 ◎黄金の釣瓶 藤森淳三 「以下27日まで。童話」
 批評と感想 川崎備寛 「以下19日まで。評論。加宮貴一、廣津和郎「狗が疲れてゐる」、葛西善蔵」
- 18 性格表現 石濱金作 「評論」
- ◎演劇漫談 塚本靖 「以下23日。随筆」
- ◎赤文字の日 小嶋政二郎 「以下27日まで。随筆」
- 20 文芸と主観 今野賢三 「以下23日まで。評論」
 小田原雑記 柴山武矩 「以下22日。随筆」
- 読書顧問 平田禿木氏の訳―カッパ―ファイルド 戸川秋骨 「以下21日。書評」
- ◎或る日の感想 日本の婦人は杓子定規に囚はれ過ぎます 厨川蝶子 「以下22日まで。評論」
- 22 文芸寸言 生活期 川崎備寛 「短評論」
- 23 深刻なる小説 加宮貴一 「以下27日まで。評論」

文芸寸言 女流作家礼賛 川崎備寛 [短評論]

24 朝涼 角田健太郎 [以下28日まで。随筆]

25 文芸寸言 コントの定義 川崎備寛 [短評論]

26 文芸寸言 新潮の『一問一答録』 朝野淳 [短評論]

28 文芸痴論 間宮茂輔 [以下29、30、8月3、6日。評論]

文芸寸言 ウキスキーと作品 朝野淳 [短評論]

◎狸の象と狐の獅子 大田黒克彦 [以下連載童話]

29 作と人と 藤森淳三 [以下30、8月3日。評論]

文芸寸言 マヤ夫人 朝野淳 [短評論]

○夫婦喧嘩 ABC [以下9月9日まで。小説]

30 文芸寸言 加宮貴一氏に 川崎備寛 [短評論]

※童話 空疊先生 河東生 [童話]

※微笑詩 桜郎 [詩三編]

大正14年9月

4 ◎四郎と玉手箱 野村吉哉 [以下10日まで。童話]

希望二三 藤沢清造 [以下6日まで。評論]

二科偶感 黒田重太郎 [以下9日まで。評論]

文芸寸言 馬と拍車 橋爪健 [短評論]

6 佐渡ヴィジブル 小嶋政二郎 [以下8、10日。随筆]

◎上乘の左団次―オセロ―劇を見て 池田大伍 [評論]

※童話 子供と電車とお婆さん 清藤森夫 [童話]

※微笑詩 桜郎 [詩三編]

8 作品読んだまゝ 廣津和郎 [以下10、13日。評論。中河與一「地獄」、武林無想庵「Comの嘆き」、芥川龍之介「海のほとり」、徳田秋声「髪」、「幼児」]

9 秋季創作大観 堀木克三「以下11日まで。評論。志賀直哉「瑣事」、里見弴「蚊」、正宗白鳥「昔の西片町の人々」、

近松秋江「銀河を仰いで」、中河與一「地獄」、宇野浩二「十軒路地」

10 文芸寸言 犠牲球 橋爪健「短評論」

○虎疫来る 正木不如丘 「以下10月12日まで。隨筆」

11 文芸手録 十一谷義三郎 「以下12日。評論」

◎ホテルの一夜―継子になつた入道雲の子供の話 相馬泰三 「以下25日まで。童話」

12 読書顧問 著者自薦 法城を護る人々 松岡讓 「書評」

13 楽壇閑話 黒頭巾 「評論」

◎作者から見た『飢渴』の出来栄え 長田秀雄 「評論」

15 院展の彫刻を見て 藤井浩祐 「以下16、18、20、22日。評論」

16 個人的背景 谷崎精二 「以下18日まで。隨筆」

17◎ローラン氏に見込まれて世界文壇のお歴々と列ぶ日本一の女性―吉村せい子さん 「記事」

18 文芸寸言 批評と学識 川崎備寛 「短評論」

19 院展漫評 デルスニス 「以下23日。評論」

二科会は解散か 昨日マヴォの一派会場に乱入 「記事」

ペンと鉛筆―二科会素通り 廣津和郎 「以下20、24、25日。評論」

創作数種 土屋長村 「以下23日。評論。廣津和郎「抗議常習者」、国木田虎雄「雨」、北尾亀男「女よ、氣を付け

ろ!」、稲垣足穂「武石浩坡氏と私」、藤沢清造「母を殺す」、中河與一「黒い影」、松井絳子「清酒一樽」、安中健

次郎「赤いピリオッド」

※童話 シャボン玉の顔 芝佳吉 「童話」

※玩具箱 桜郎 「詩」

26◎赤い風船玉 角田健太郎 「以下10月1日まで。童話」

文壇的正論 橋爪健 「以下27日。評論。「不同調」、新感覚派」

文芸寸言 文学青年 茂輔 「短評論」

27 『三月卅二日』の演出に就いて 池谷信三郎 「以下29日。評論」

- 29 素人の感想 南部修太郎 [以下30、10月1、2日。評論。音楽]
 30 一言、後人に贈る 横山大観 [以下10月1日。評論。美術]
 橋爪健君に 尾崎士郎 [短評論。橋爪健「文壇的正論」]
 露国文壇の現状を語る片上氏 [記事。片上伸]
- 大正14年10月
- 1 十月の小説 酒井真人 [以下7日。評論。中條百合子「崖の上」、佐佐木茂索「所謂生き死に」、今東光「青い
 荊冠」、岡田三郎「茂次郎の話」、菅忠雄「小山田夫婦の焦眉」、新居格「鳥」]
 2 十月の雑誌から 古賀龍視 [以下3日。評論。中條百合子「崖の上」、正宗白鳥「水不足」、佐佐木茂索「所謂生き
 死に」、近松秋江「奇縁」、佐藤春夫「この三つのもの」]
 尾崎士郎君に 橋爪健 [短評論。「橋爪健君に」]
 ◎孔雀と黒ん坊の話 間宮茂輔 [以下14日まで。童話]
- 3 文芸批評の転換期 吉江喬松 [評論]
 ジュネヴにて 深尾須磨子 [隨筆]
- 4 外国人の心持で生きるーわが文壇への感想 野口米次郎 [評論]
 読んだものから 谷崎精二 [以下6、7日。評論。豊嶋與志雄「古井戸」、宇野千代「往来」、宇野浩二「私小
 説私見」]
- ◎映画の紙上封切 夜ひらく ポール・モオランの小説の映画化 [記事]
 ※童話 正雄さんの夢 前田哲人 [童話]
 ※微笑詩 桜郎 [詩二編]
- 6 ◎女中マリヤに扮して 映画に出る廣津和郎氏夫人 [記事]
 現在のロシヤ劇団 片上伸 [談話]
 読者顧問 アンデルセン童話 蘆谷蘆村 [書評]
 8 新進作家の文壇観ーディアボロ・クラシー 今東光 [評論]
 芸術批評の基準 村松正俊 [評論]

- 9 新進作家の文壇観—文壇芸術の滅亡 新井紀一 [評論]
 言語感に就て 村松正俊 [評論]
 唐からし [投書。「不同調」]
- 10 新進作家の文壇観—頽廃の中から求める 今野賢三 [評論]
 新進作家の内容—十月の創作から 古賀龍視 [以下14日。評論。今東光「潤みゆく胎」「青い荊冠」、牧野信一「極夜の記」「秋晴れの日」、加宮貴一「沼」「神の指」、木蘇毅「青年」、十一谷義三郎「風騒ぐ」「白樺になる男」]
- 11 秋宵雑文 菊池寛 [以下13日。隨筆]
 新進作家の文壇観—余りに狭小である 加宮貴一 [評論]
- 13 新進作家の文壇観—竹林問答 尾崎士郎 [評論]
 唐からし △□▽ [投書。松居松翁]
- 14 新進作家の文壇観—偶然言 佐佐木茂索 [評論]
 灰皿 [記事。片上伸]
- 15 唐からし ××× [投書。藤森淳三]
 ○放送局 長田幹彦 [以下10月28日まで。隨筆]
 新進作家の文壇観—作家過剰 佐々木味津三 [評論]
 唐からし [投書]
- 16 ◎木こりのゼルビン 小嶋政二郎 [以下28日まで。童話]
 新進作家の文壇観—素晴らしい進歩だ！ 戸川貞雄 [評論]
 灰皿 [記事。葛西善蔵]
- 17 唐からし [投書。コントについて]
 新進作家の文壇観—聡明なる読書階級現れよ 伊藤貴磨 [評論]
 『望郷』小話 池谷信三郎 [以下20日。自作解説]
- 18 灰皿 [記事。倉田百三]
 新進作家の文壇観—僕の立場から 稲垣足穂 [評論]

読書顧問 『女工哀史』 奥むめお [書評]

※童話 玩具をくれた乞食 清藤森夫 [童話]

※微笑詩 桜郎 [詩二編]

20 新進作家の文壇観―年齢戦と新リアリズム 横光利一 [評論]

21 新進作家の文壇観―生活意志がない 金子洋文 [評論]

灰皿 [記事。内田魯庵の墓所]

22 文壇の圏外から 小山内薫 [評論]

洋画の入札 石井柏亭 [随筆]

23 小川未明論―(時代の内観的覚醒者) 吉江喬松 [評論]

最近のハアデイ―八十六歳の詩人 D [記事]

24 公器と私器の問題―菊池寛氏に与ふ 中村武羅夫 [以下25、27、28日。評論]

唐辛 [投書。宇野浩二]

灰皿 [記事。弓削田精一]

◎菊五郎一座の『亭主』 久保田萬太郎 [以下25日。評論。演劇]

25 唐辛 [投書。三上於菟吉]

28◎中央公論の瀧田氏死す [記事]

プレーデアリズム 小嶋政二郎 [以下30日まで。随筆。永井荷風]

唐辛 [投書。「新進作家の文壇観」]

29◎正直若者 酒井朝彦 [以下11月11日まで。童話]

十二人の受験者―新進作家の文壇観を読んで 生田長江 [以下30、11月5日。評論]

30◎薬局生の初恋 正木不如丘 [以下11月12日まで。小説]

大正14年11月

1◎国字の再論 高木健夫 [評論]

6 新戯曲の方法(岸田君の戯曲集を評す) 関口次郎 [以下7日まで。評論。岸田国士戯曲集]

- ◎現在の露西亞婦人生活の印象 片上伸 [隨筆]
- 7 東洋の古美術―展覽會に就て 武者小路実篤 [以下8日。評論]
- 十一月創作御案内―酷評ごめん 井汲清治 [評論。吉田弦二郎「父と母との墓」、佐々木味津三「三十二の秋」]
- 灰皿 [記事。河井醉茗]
- 8 ベルリンの芝居 稲毛祖風 [以下10、11日。評論。演劇]
- ◎河井醉茗氏五十年祝賀 [記事]
- 9 ◎『佳人之奇遇』を読む 下田将美 [書評]
- 10 演劇時評 水木京太 [評論]
- 11 ◎結局声の囁らし損―新案原稿たゞき売り [記事]
- 灰皿 [記事。堀口大学]
- 12 文芸新主義の興亡 井汲清治 [以下14日まで。評論]
- 十一月創作御案内―酷評ごめん 木村毅 [評論。谷崎潤一郎「馬の糞」]
- 実用化する美術―可志和会の作品を見る 川路柳虹 [評論]
- ◎旅の彫刻師と一寸法師 新井紀一 [以下25日まで。童話]
- ◎北京漫記 高木健夫 [以下30日まで。隨筆]
- 13 十一月創作御案内―酷評ごめん 青野季吉 [評論。斎藤茂吉「八十吉」、池谷信三郎「まいとん」、網野菊、稲垣足穂、萩原朔太郎、片岡鐵兵]
- 灰皿 [記事。小牧近江]
- 14 作家の觀た現代の挿画家 三上於菟吉 [評論]
- 文士と語学 大方源吾 [以下15、19、20、22、25、27、12月2、4、8、10、16、18日。隨筆]
- 15 作品と作者―若き人々の為に 田山花袋 [以下17、18日。評論]
- 16 ◎進化論と階級闘争―『生物突變説』(下、フリーズ著横田千元訳) 堺利彦 [書評]
- 17 晩秋の京―東三本木から 正宗得三郎 [以下19、20日。隨筆]
- 酷評の話 岡田三郎 [評論。萩原朔太郎「非論理的性格の悲哀」]
- 18 灰皿 [記事。近松秋江]

19 吾が新居の事 訪問来過諸客必読 佐藤春夫 [以下21日まで。随筆]

20 唐辛 [投書。「女性」12月号]

21 小説と音楽 藤浦洸 [評論]

22 文壇の党派的傾向 上司小剣 [以下25日。評論]

灰皿 [記事 西條八十]

※童話 ふんばり土橋 元島英三 [童話]

※微笑詩 桜郎 [詩二編]

26 ヘルン先生 戸川秋骨 [以下28日まで。随筆]

文士驕慢 金子光晴 [評論。佐藤春夫「吾が新居の事」]

唐辛 [投書。菊池寛]

27◎王様の見た夢 伏見茂雄 [以下12月9日まで。童話]

28 十二月創作文案内A 駄作佳作 新居格 [評論。久保田萬太郎「しぐれ」、水上瀧太郎「果樹」、悦田喜和雄「悲しき願ひ」、木下杢太郎「安土城記」、豊嶋與志雄「不肖の兄」]

詩人正直—金子光晴君に買ひ言葉 佐藤春夫 [評論。「文士驕慢」]

灰皿 [記事。泉鏡花]

29 十二月創作文案内B 老醜 平林初之輔 [評論。正宗白鳥「老醜」、酒井不木「痴人の復讐」]

大正14年12月

1 ハアデイ論 シエラアド・ヴァイアンス [以下3日まで。評論]

十二月創作文案内 佳作五人 鷹野つき [評論。正宗白鳥「老醜」、豊嶋與志雄「不肖の兄」、水上瀧太郎「果樹」、

悦田喜和雄「悲しき願ひ」、小川未明「Kの右手」]

○キネクラブ戯談 正岡容 [以下11日まで。小説]

2 幕間劇(築地のピラデルロ感想) 金子洋文 [評論]

十二月創作文案内D—大谷刑部 村松正俊 [評論。吉田弦二郎]

3 十二月創作文案内E 駄評失敬 小牧近江 [評論。田代倫「第三の太陽」他]

- 4 英国現代の批評家 佐藤清 [以下5日。評論]
芝居くされ縁 藤沢清造 [以下6日まで。随筆]
灰皿 [記事]
- 5 読書顧問 高島氏の全訳『資本論』 安部磯雄 [以下6日。書評]
生誕五十年祝賀の金子薫園氏 [記事]
危篤を伝へられる英国文豪キプリング [記事]
本年の傑作は? 島村民蔵・新居格・松居松翁 [アンケート]
- 6 演劇 異風印象記 三上於菟吉 [評論]
◎夏目漱石と私 中村武羅夫 [以下11日まで。評論]
本年の傑作は? 生田長江・長沼重隆・今東光 [アンケート]
ことほぎ歌 皇孫御降誕 山田邦子 [短歌四首]
- 8 唐辛 [投書。葛西善蔵]
- 9 一茶と童心句 藤田健次 [以下16日。評論]
◎悪い癖の少年 山崎亨 [以下16日まで。童話]
12 文士の遺跡—文学堂建設について 波多野承五郎 [以下13、15日。評論。有島武郎]
◎お酉様 正木不如丘 [以下連載。小説]
13 ◎鏡花先生 ラジオを語る 思出のまゝに [談話]
◎市人 細田源吉作 高島華宵画 [以下連載]
- 17 党派の力と個人の力—天才か党派か 徳田秋声 [以下18日。評論]
紅蓮洞の死 [記事]
灰皿 [記事]
- ◎鐘と悪魔 ヨハンフアブリシウス 上田壽四郎 [以下連載。童話]
18 歳末遺族訪問—岩野泡鳴 和井洞 [記事]
愚劣な分裂運動—天才か党派か 前田河廣一郎 [評論]
19 歳末遺族訪問—厨川白村 和井洞 [記事]

- 20 相互賛美会社―天才か党派か 野口米次郎 [評論]
 歳末遺族訪問―国木田独歩 和井洞 [記事]
 交響楽の悩み 山田耕作 [評論]
- 22 眞の流派と似而非流派―天才か党派か 平林初之輔 [評論]
 歳末遺族訪問―尾崎紅葉 和井洞 [記事]
 灰皿 [記事]
- 23 恩牛怨李―天才か党派か 加藤武雄 [評論]
 歳晚閑談 戸川貞雄 [以下26、27日。随筆]
 歳末遺族訪問―森鷗外 和井洞 [記事]
 僕の文壇党派観―天才か党派か 中村星湖 [評論]
- 24 歳末遺族訪問―二葉亭四迷 和井洞 [記事]
- 25 ◎本社懸賞当選小説『新恋愛行』―貴司山治作 [記事]
 『愛と死の戯れ』ロオラン氏最近戯曲 高橋邦太郎 [以下16日まで。評論]
 歳末遺族訪問―小泉八雲 和井洞 [記事]
 26 ○黒髪夜叉 前田曙山作 鱒崎英朋画 [以下連載。小説]
 27 ◎大正十四年の劇界と映画界 本年の劇壇瞥見 中村吉蔵 [評論]
 ◎大正十四年の劇界と映画界 今年の映画界 立花高四郎 [評論]
 29 年末文壇を語る 水守亀之助 [以下31日まで。評論]
 読書顧問 『蕪村の新研究』 志田義秀 [書評]

「時事新報」人名索引

() 内数字は、評論等の対象とされた場合を示す。

伊藤貴麿	伊藤永之介	泉鏡花	石濱金作	石井柏亭	池谷信三郎	池田大伍	井汲清治	生田長江	生田葵	い	安中健次郎	有島武郎	新井紀一	網野菊	安部磯雄	蘆谷蘆村	朝野淳	秋庭俊彦	芥川龍之介	青野季吉		
(6)	8	(8)	9	14	11	10	7	14	(7)		(11)	(17)	8	(8)	17	12	10	7	8	15		
(8)	(9)	(16)			13	15	17					13	15	(9)	(15)				(10)			
		(17)			(15)																	
大田黒克彦	大久保幸次	大方源吾		桜郎	お			悦田喜和雄	A B C	宇野千代	宇野浩二	内田魯庵	上田壽四郎		岩野泡鳴	イルジム、クユ	今野賢三	犬田卯	犬養健	稲垣足穂	稲毛祖風	
10	9	5	16	10				(16)	7	(8)	(11)	(14)	17		(17)	9	9	(9)	(6)	15	(11)	13
			11				10		(9)	(12)	(12)					13		(7)	(7)	(13)	(15)	
			12						(12)	(14)												
			14																			
金子光晴	金子洋文	金子薫園	加藤武雄	加藤一夫	カッパフィールド	片上伸	片岡鐵兵	葛西善蔵	角田健太郎	か		小栗風葉	奥むめお	小川未明	岡田嘉子	岡田三郎	岡栄一郎	大矢透	小山内薫	尾崎紅葉	尾崎士郎	
16	(9)	(17)	(7)	(7)	(9)	(12)	(8)	(17)	11		(7)	14	14	(14)	(9)	(12)	6	(7)	14	(18)	(9)	
(16)	14		18			12	(9)	(9)	(9)		(7)			(16)	15					(12)	12	
	16					13	(15)	(13)													(12)	
						15															13	
木村庄三郎	キプリング	清藤森夫	木下柰太郎	木蘇毅	貴司山治	岸田国士	北尾亀男	菊池寛	き		神崎清	川路柳虹	川崎備寛	川崎長太郎	河東汀	川端康成	河井醉茗			加宮貴一	上司小剣	
8	(17)	8	(16)	(13)	(18)	(14)	(11)	(7)			6	15	8	7	10	(8)	(15)	13	9	(6)	16	
		10				(14)	(16)	(13)					9			(9)			(10)	(8)		
		14				(11)	(14)	(14)					10						(13)	(9)		

齊藤龍太郎	齋藤茂吉	西条八十	さ	今東光	小松原傷	小牧近江	小嶋政二郎	古賀龍視	小泉八雲	こ	黒頭巾	黒田重太郎	厨川白村	厨川蝶子	倉橋惣三	倉田百三	久米正雄	久保田萬太郎	国木田虎雄	国木田独歩	く	木村毅			
6	(15)	(16)		(12)	9	(15)	9	12	(16)		8	10	(17)	9	7	(13)	(7)	14	(11)	(18)		15			
				12		16	10	13	(18)		11								(16)						
				17			13	14																	
十一谷義三郎	下村千秋	下田将美	島村民藏	柴山武矩	芝佳吉	志田義秀	志賀直哉	しす	△△△	里見弾	佐藤春夫	佐藤紅緑	佐藤清		佐佐木茂索		佐々木味津三	ささきふさ	佐々木邦	坂本紅運洞	酒井真人	酒井朝彦	堺利彦		
11	(9)	15	17	9	11	18	(11)		13	(6)	(12)	(7)	17	(12)	(6)	13	(9)	6	(17)	12	(16)	14	15		
(13)									(7)	(7)	(16)	(16)		(8)	(8)	(9)									
土屋長村	塚本靖		近松秋江	ちと		鷹野つぎ	田山花袋	谷崎精一	谷崎潤一郎	立花高四郎	多田不二	田代倫	武林無想庵	瀧田袴陰	高橋邦太郎	高島素之	高島華宵	高木健夫		相馬泰三	関口次郎	諏訪三郎	鈴木彦次郎	菅忠雄	
11	9	(15)	(6)		16	(7)	(7)	7	(6)	18	7	(16)	(10)	(14)	18	(17)	(17)	14		11	14	(6)	(8)	(6)	
			(11)			15	11	12	(15)									15			(8)	(9)	(12)		
			(12)																		(8)	(9)			
沼田藤次	新居格			南部修太郎	夏目漱石	中村武羅夫	中村星湖	中村吉蔵	長沼重隆	長田幹彦	長田秀雄	中條百合子	中河與一	永井荷風			豊嶋與志雄	徳田秋声	戸川秋骨	戸川貞雄	手塚鶴代	デルスニス	D	坪内逍遙	角田健太郎
8	(12)			12	(17)	(7)	18	18	17	13	11	(12)	(9)	(14)		(6)	(7)	9	13	(7)	11	14	(6)	10	
	16					14										(12)	(10)	16	18						
	17					17										(16)	(10)								

藤森淳三	伏見茂雄	藤田健次	藤次清造	藤浦 洸	藤井浩祐	深尾須磨子	ふゝほ	廣津須磨子	廣津和郎	鱒崎英朋	平林初之輔	平田禿木	林 政雄	波多野承五郎	橋爪 健	萩原朔太郎	ハーデイ、トマス	はゝひ	野村吉哉	野口米次郎				
(13)	7	16	17	(6)	16	11	12	(12)	(11)	(9)	6	18	16	18	(9)	9	17	10	(15)	(14)	(16)	10	12	18
		9		10	(11)	17				11	8													
三上於菟吉	みくも			間宮茂輔	松林伯知	松岡 譲	松井締子	松居松翁	正宗白鳥	正宗得三郎	正木不如丘	正岡 容	牧野信一	前田河廣一郎	前田哲人	前田曙山	ま	堀口大学	堀木克三	細田源吉	フリーズ、ド	二葉亭四迷		
7	(7)	(14)		10	6	8	11	(11)	(13)	(16)	(8)	15	17	7	16	(13)	(8)	12	18		(15)	(18)		
				11	7	8		17	(11)	(12)				17						(8)	(9)			
				12	8	9					14									9	11			
横山大観	横光利一	横田千元	弓削田精一	山本 鼎	山田耕作	山田邦子	山崎 亨	やゝよ	森 鷗外	森田草平	元島英三	モオラン、ポール	室生犀星	村松正俊	武者小路実篤	宮地嘉六	三宅幾三郎	宮城々輝	南 幸夫	水上瀧太郎	水守龜之助	水木京太		
12	14	(6)	(15)	(14)	(9)	18	17	17	(18)	(7)	16	(12)	(6)	9	(7)	7	(6)	7	(9)	(9)	(16)	18	8	15
		(8)	(9)										12	13	15	(9)						15	17	
													16											
													ヴァイアンス、シエラード	和田 博	和井 洞	ローラン、ロマン	らゝわ						吉田弦二郎	吉江喬松
													(9)	(9)	17	(11)						(6)	12	
															18	(18)						15	14	
																						(16)		
																						17		